

平成二十四年十月十日発行
皇學館論叢第四十五卷第五号
抜刷

研究ノート

『玉葉和歌集』の未調査伝本について

— 佛敎大学附属図書館所蔵本の位置づけと特徴 —

千 中

古 條

利 敦

恵

子 仁

『玉葉和歌集』の未調査伝本について

— 佛教大学附属図書館所蔵本の位置づけと特徴 —

中 條 敦 仁
千 古 利 恵 子

□ 要 旨

玉葉和歌集の現存伝本は二十一代集所収本も含めると多く、その全容の研究はこれからといえる。現存伝本中で、これまで未調査であった佛教大学附属図書館所蔵本の調査をする機会を得た。そこで、書誌調査および分類基準歌の有無の確認をおこない、これまで中條が調査した結果と照らし合わせることで、当該本の玉葉和歌集現存伝本における位置づけと、伝本としての特徴を述べた。その結果は、現状四類に分けられる玉葉集伝本の第三類に属し、特に宮内庁書陵部蔵二十一代集所収本（函架番号 四〇〇・一〇）

に限りなく近いことがわかった。このことから、今後、佛教大学本と書陵部本の本文異同の調査をおこない両本の関係を考えていくことが課題として残される。

□ キーワード

伝本研究 玉葉和歌集 書誌調査 分類基準歌
系統分類

一 はじめに

『玉葉和歌集』（以下、玉葉集と表記）伝本の先駆的な研究として濱口博章氏の一連の研究がある。

- ・ 太山寺本玉葉和歌集^(注1)
- ・ 桂宮本玉葉和歌集^(注2)
- ・ 禁裡本玉葉和歌集について^(注3)
- ・ 陽明文庫蔵玉葉和歌集（甲）本^(注4)
- ・ 陽明文庫蔵玉葉和歌集（甲）本^(注5)
- ・ 正中二年奥書玉葉和歌集^(注6)
- ・ 板本玉葉和歌集の本文校訂私案^(注7)

これを受け、岩佐美代子氏はさらなる伝本調査・整理を進め、宮内庁書陵部蔵吉田兼右筆本（五一〇・一三）を中心に十三種の伝本を対象にし、異本歌の所収状況・詞書の異同・作者名表記の異同を手がかりに分類と位置づけをおこなった。その結果を『玉葉和歌集全注釈 別巻』^(注8)解題にまとめている。この中で、岩佐氏は、「更に諸伝本を精査してこの表（岩佐氏作成の分類表）に加えていけば、ある程度系統立てても可能であると思われる。」と述べている。このことを受け、中條はさらに伝本調査を進め、その結果を「十三代集系統分類一覧―分類基準歌と

系統分類表^(注9)」としてまとめた。その系統分類一覧作成段階では未調査であった佛教大学附属図書館所蔵『玉葉和歌集』を調査する機会を得たため、本稿では、その伝本の玉葉集伝本全体における位置づけと特徴を報告する。

二 書誌データ

次に、佛教大学附属図書館所蔵本（以下、佛大本と表記）の書誌データを示す。

* 内題…「首題」「玉葉和歌集巻第一」（以下、「玉葉和歌集巻二十」まで）

* 外題…ナシ

* 見返し…金銀箔散らし

* 奥書…ナシ

* 冊数…三冊

* 寸法…縦二一・八糎 × 横一五・五糎（…）

* 表紙「原表紙」…黄土色・布目、四角織紋に菱散らし

* 装丁…綴葉装

* 本文行数…一〇行（和歌一首一行書き、詞書二字下げ）

* 書入…あり（墨跡・主本文と同筆）

* 貼紙・付箋…ナシ

* 伝来・旧蔵・書写者・書写年…不明

* 紙数…上冊（前遊紙一丁、墨付き一三七丁、後遊紙一

丁 八葉）

中冊（前遊紙一丁、墨付き八九丁 八葉）

下冊（墨付き一四二丁、後遊紙一丁 八葉）

* その他の情報

① 三冊の内訳

上冊…巻第一から巻第七（春上・下、夏、秋上・

下、冬、賀）

中冊…巻第八から巻第十三（旅、恋一・二・三・

四・五）

下冊…巻第十四から巻第二十（雑一・二・三・

四・五、釈教、神祇）

② 本文料紙

鳥の子紙。料紙は「無地」と「金箔散らし」「金泥にて草花、墨流し、山霞、刷毛等の紋様を施したもの」がある。

③ 書き入れ

二種類の書き入れ（「本文脱落訂正」と「イ本

注記」）がある。注記は本文と同筆。

『玉葉和歌集』の未調査伝本について（中條・千古）

④ 書写年代・書写者（稿者による推定）

・ 墨色、筆跡、料紙等から、おおよそ室町最末期から江戸初期にかけての書写といえるか。
・ 筆跡は流暢な公家の筆跡のようであり、装丁、料紙等から考えると、書写者は、公家あるいは、上級武家の可能性が高い。

三 系統分類結果

次に、これまでに調査し得た二十四種に佛大本を加えた計二十五種の伝本を対象に、系統分類を行った。分類の方法は、これまでの伝本比較から導き出された二十五首の基準歌（以下、分類基準歌と表記）の収録状況による。

（1）分類基準歌

分類基準歌は、次に示すa～yの二十五首である。

百首歌の中に 重之女

a うぐひすのまだものうげになくめるはけさも梢に雪
やふるらん

（春歌の中に）

躬恒

b あけぬともをりやまどはむ梅の花いづれともなく雪
のふれれば

題しらず 山辺赤人

c きてみべき人もあらなくに我がやどの梅のはつ花ち
りぬともよし

(題しらず) 隆教

d うき身にはいつともわかぬ涙にてかすみをとる春
のよの月

(花歌とて) 院御製

e ひととせはみな春ながらすぎなむのどかに花の色
もみるべく

(露をよみ侍りける) よみ人しらず

f おきのこる草葉もみえぬ夕露のわが袖にさへ又あま
りぬる

海辺月明 後鳥羽院御製

g 清見がたふじの煙や消えぬらむ月影みがくみほのう
ら波

秋歌のなかに 行念法師

h 山のはをむら雲ながら出でにけりしぐれにまじるあ
きのよの月

題しらず 藤原為成朝臣

i あづまちの秋の空にぞ思ひいづる都にて見し春夏の月
人のもとにつかはしける

小野小町

j 世の中はあすか川にもならばなれきみとわれとがな
かしたえずは

(題しらず) 人麿

k むば玉の妹が黒髪こよひもや我が無き床に靡きてぬ
らん

三条院みこの宮と申しける時女房に物申しけるに
位につかせ給てのちいかにとかやきこえければ

前大納言公任

l 九重のうちはかはれどみかきもりおなじおもひぞい
まもたくらん

題しらず 本院侍從

m 世の中をおもふもくるしおもはしと思ふも身にはお
もひなりけり

弘長百首歌奉りける時遇不逢恋 衣笠前内大臣

n いかにせん岩間を伝ふ山水の浅き契は末もとほらず
寄面影恋といふ心をよませ給うける

院御製

o 人の見する面かげならばいかばかり我が身にそふも
うれしからまし

(題しらず) 前大僧正道潤

p 木木の花もえいづる草のあさみどりいづれも春の色に成りぬる

西行法師がもとへつかはしける 待賢門院堀川

q この世にてかたらひおかんほととぎすしでの山ぢのしるべともなれ

(歳暮の心を) 顕輔

r はかなくてくれぬる年をかぞふればわが身も末になりけるかな

後法性寺入道前関白家に百首歌よませ侍ける中に

歳暮 俊成

s あはれなり数にもあらぬ老の身を猶たづねてもつもる年かな

物へまかりける道に大きな川わたるとて

御形宣旨

t 山川の岩まの浪の高ければかへらんことのかたくも有るかな

持統天皇伊勢の国に行幸の時都に留りて

(人麿)

u をみの浦に舟のりすらむつまじもの玉ものすそにしほみつらむか

西院皇后宮とおなじ所にわたらせ給けるが外へう

『玉葉和歌集』の未調査伝本について (中條・千古)

つらせ給ける時かの宮より思へどもつらくも有るかなうりふ山いかにせよとか立ちはなるらんと聞えさせ給ける御返し (上東門院)

v いとへどもうき世の外にならぬ身を立ちはなるとも

おもはざらなむ月あかき夜西行法師にあひて出家のことおもひたつ由かたらひて後其夜のなごりお

ほかりし由つかはすとて 中院入道右大臣

w 夜もすがら月をながめて契りおきしそのむつごとにやみははれにき

此身如水月の心を 前大納言公任

x 水の上にやどれる夜半の月影のすみとくべくもあらぬ我が身を

法師品寂莫無人声読誦此經典我爾時為現清浄光明身の心をよみ侍りける 俊成

y とふ人のあとなき柴のいほりにもさしくる月の光をぞまつ

(2) 分類基準歌の収録状況

次に、分類基準歌の収録状況を、新編国歌大観番号によって示す。表記については、次の通りである。

〔場所〕 分類基準歌の玉葉和歌集における収録巻名・部立および収録位置

〔既出〕 分類基準歌が玉葉和歌集に先行する勅撰集に収録されている

〈重出〉 分類基準歌が玉葉和歌集中に重複・収録されている

〈後出〉 分類基準歌が玉葉和歌集以後の勅撰集に収録されている

（↓○） 及び （↓●） の表記について

分類基準歌 a、同 b は伝本により、その収録場所に異同がある。

後に示す「系統別、分類基準歌収録状況一覧表」では、a、b の収録場所を「○」「●」印で区別し、表示した。

なお、〈既出〉〈後出〉の場合は、その収録勅撰集名と新編国歌大観番号を記した。

a 〔場所〕 卷第一・春上・四二次（↓○）もしくは 卷

第十四・雑一・一八四三（↓●）

b 〔場所〕 卷第一・春上・六三次（↓○）もしくは 卷第一・春上・六二次（↓●）

c 〔場所〕 卷第一・春上・六四次

〔既出〕 後撰集・二三

d 〔場所〕 卷第一・春上・一二二次

〔重出〕 一八五七

e 〔場所〕 卷第二・春下・一七三次

f 〔場所〕 卷第四・秋上・五四七次

g 〔場所〕 卷第五・秋下・六六四次

〔後出〕 風雅集・六三二

h 〔場所〕 卷第五・秋下・七七〇次

〔既出〕 新後撰集・三八六

i 〔場所〕 卷第八・旅・一一四六次

〔重出〕 一九七九

j 〔場所〕 卷第十一・恋三・一四九六次

〔後出〕 風雅集・一二三二

k 〔場所〕 卷第十一・恋三・一五五七次

〔既出〕 拾遺・八〇二、拾遺抄・三六〇

l 〔場所〕 卷第十一・恋三・一五六六次

m 〔場所〕 卷第十一・恋三・一五七九次

〔重出〕 二五四五

n [場所] 卷第十一・恋三・一五八三次

〔既出〕新後撰集・一〇五二

o [場所] 卷第十三・恋五・一七九四次

〔重出〕一八二一

p [場所] 卷第十四・雜一・一八五三次

q [場所] 卷第十四・雜一・一九二九

〔既出〕新後撰集・一五五六

r [場所] 卷第十四・雜一・二〇五六次

〔重出〕一〇二六

s [場所] 卷第十四・雜一・二〇五八次

〔重出〕一〇三三

t [場所] 卷第十五・雜二・二〇六七次

u [場所] 卷第十五・雜二・二〇七九次

〔既出〕拾遺集・四九三

v [場所] 卷第十六・雜三・二二八七次

〔後出〕新統古今集・九二一

w [場所] 卷第十八・雜五・二四九八次

〔既出〕新後撰集・六五一

x [場所] 卷第十九・釈教・二六四七次

y [場所] 卷第十九・釈教・二六六二次

〔既出〕新後撰集・六一八

『玉葉和歌集』の未調査伝本について（中條・千古）

（3）系統分類結果

次に、分類基準歌の収録状況から、系統分類を試みる。
記載にあたり、以下の記号などを用いた。

・各伝本には【鍋島】【書陵B】などの略名を付した。
・伝本の整理番号上に付した「+」「*」は次のことを示す。
「+」は岩佐氏の未調査本で、中條が調査し追加した伝本
「*」は稿者未見のため、岩佐氏の調査・分類結果を使用した伝本

なお、「+」も「*」も付していない無印のものは、岩佐氏の調査対象伝本を稿者も調査したものである。

〔第一類〕（分類基準歌を多く含む系統）

1 【鍋島】 武雄市教育委員会蔵鍋島文庫蔵本

2 【書陵冬】 宮内庁書陵部蔵冬木翁筆・二十一代集

所収本（四〇三・一二）

〔第二類〕（切出注記を持つ系統）

- 3 〔書陵B〕 宮内庁書陵部蔵・二十一代集所収本
（四〇〇・七）
- + 4 〔多和〕 多和文庫蔵本（一一・一）
- 5 〔陽明B〕 陽明文庫蔵本（近・二四四・三七三／
近・二二六・五）
- + 6 〔歷博〕 国立歴史民俗博物館（旧高松宮）蔵・
二十一代集所収本（も一三）
- 〔第三類〕（既出・重出・切出歌を数首含む系統）
- * 7 〔書陵C〕 宮内庁書陵部蔵・二十一代集所収本
（四〇〇・一〇）
- + 8 〔佛大〕 佛教大学蔵本（本稿において紹介の伝
本）
- + 9 〔河野〕 河野美術館蔵・二十一代集所収本
（二〇一・六八二）
- + 10 〔内閣A〕 内閣文庫蔵本（二〇〇・八二）
- + 11 〔内閣B〕 内閣文庫蔵本（二〇〇・八三）
- 12 〔書陵親〕 宮内庁書陵部蔵飛鳥井雅親筆本
（五〇三・二二七）
- 13 〔白田〕 白田甚五郎氏蔵正中二年奥書本
- 14 〔太山〕 太山寺蔵明石長行寄進本

〔第四類〕（流布本系、既出・重出・切出歌を含まない系統）

- 15 〔陽明A〕 陽明文庫蔵・十三代集所収本（近・
五三・六）
- 16 〔書陵雅〕 宮内庁書陵部蔵飛鳥井雅章筆・二十一
代集所収本（五〇八・二〇八）
- + 17 〔書陵A〕 宮内庁書陵部蔵・二十一代集所収本
（C・一九七）
- + 18 〔尊經〕 尊經閣文庫蔵・二十一代集所収本
（三六三・五）
- + 19 〔蓬左〕 蓬左文庫蔵伝智仁親王筆・二十一代集
所収本（一六四・二）
- + 20 〔国資〕 国文学研究資料館蔵（福田秀一氏旧
蔵）・二十一代集所収本
（ア2・10・28／31）
- + 21 〔桑名〕 桑名市博物館蔵松平定信筆・細写十三
代集所収本
（二四八・〇三〇一〇〇〇九五）
- + 22 〔玉里〕 鹿児島大学附属図書館蔵玉里文庫・
二一代集所収本（天三六・四九四）
- 23 〔正版〕 正保四年版・二十一代集所収本
- + 24 〔無版〕 無刊記版・二十一代集所収本

25 【書陵兼】 宮内庁書陵部蔵吉田兼右筆・二十一代

集所収本（五一〇・一三）

（4）系統別、分類基準歌収録状況一覧表

次に、各伝本の系統区分と分類基準歌の収録状況を、調査伝本全体の関係を概観するために表としてまとめた【表1】本稿末に提示。表示する上で、次の略号を用いた。

- ・伝本名は、【鍋島】【書陵】などのように「系統分類結果」の略号で記載した。
- ・「○」は分類基準歌を所収し、×は所収しないことを示す。
- ・「△」は分類基準歌が細字書入れされていることを示す。
- ・「切」は分類基準歌の頭や右肩に「切出」の注記があるもの。
- ・「／」は分類基準歌の前後も歌を書いていることから、有無を判断しにくいもの。
- ・【書陵C】及び【佛大】の分類基準歌は、詞書は存するが、和歌本文を欠いているため「詞迄」と注記した。
- ・表中「○」「●」は、「（2）分類基準歌の収録状況」に示した記号に一致する。

（5）佛大本と他伝本との関係について

表1から見て明らかのように、①佛大本系統分類上、第三類（既出・重出・切出歌を数首含む系統）に位置すること、書陵部C本とは、②分類基準歌の収録状況が一致すること、③分類基準歌について共に詞書までは存在するが、その和歌本文を欠いていること、④この現象は、現在調査し得た他伝本にはみられないことの①④の四点が明らかになった。特に、書陵C（本と佛大本は、底本と書写本（親子関係）か、あるいは、同一祖本から派生した本（兄弟関係）という、かなり近い位置関係にあると想定できる。

四 おわりに

以上、これまでの伝本調査の結果を踏まえて佛大本の系統分類上他本との関係の特徴を示した。稿者は、現在書陵C本の精査をおこなえておらず、本文レベルでの両伝本のより詳細な関係の把握はできていない。今後、書写状態、筆跡や本文異同などの比較調査をおこなった上で、両伝本の詳細な関係を考えていくことが課題として残される。

【表1】分類基準歌収録状況一覧

所蔵者 略号	基準歌																		
	a	b	既	重	e	f	後	既	重	後	既	重	後	既	重	後	既	重	後
一																			
銅鳥	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	×
書陵部冬	○	○	○	○	×	○	○	○	×	×	×	○	×	×	○	○	○	○	×
書陵部B	○	●	○	○	○	○	○	○	○切	×	×	×	×	○切	○切	○切	○切	○切	○切
多和	○	○	○	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○切	○切	○切	○切	○切	○切
陽明B	○	○	○	○切	○切	○切	○切	○切	×	○	×	×	○切	○切	○切	○切	○切	○切	○切
歴博	○	○	○	○切	○切	○切	○切	○切	×	○切	×	×	○切	○切	○切	○切	○切	○切	○切
書陵部C	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
佛大	○	○	○	○	○	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
河野	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
内閣A	○	○	○	○	×	○	○	×	×	×	×	×	／	／	／	／	／	／	／
内閣B	○	○	○	○	×	○	○	×	×	／	／	／	／	／	／	／	／	／	／
書陵親	○	○	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
臼田	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
太山	○	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
陽明B	●	○	○	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
書陵雅	●	×	×	×	×	×	○	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×
書陵A	●	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
尊経	●	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
蓬左	●	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
国寶	●	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
桑名	●	×	×	×	×	×	○	×	／	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
王里	●	×	×	×	×	×	○	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×
正保	●	×	×	×	×	×	△	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×
無刊	●	×	×	×	×	×	△	×	×	△	×	×	×	×	×	×	×	×	×
書陵兼	●	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×

(注)

1. 「太山寺本玉葉和歌集攷」(「甲南大学文学会論集」第四号 一九五六年)
2. 「桂宮本玉葉和歌集攷」(「甲南大学文学会論集」第六号 一九五七年)
3. 「禁裡本玉葉和歌集について」(「国語国文」一九五八年)
4. 「陽明文庫蔵玉葉和歌集(甲)本攷」(「国語国文」一九五九年)
5. 「陽明文庫蔵玉葉和歌集(甲)本攷」(「甲南大学文学会論集」第九号 一九五九年)
6. 「正中二年奥書玉葉和歌集攷」(「甲南大学文学会論集」第十号 一九五九年)
7. 「板本玉葉和歌集の本文校訂私案」(『中世和歌の研究―資料と考証―』(新典社研究叢書32 新典社 一九九〇年)
8. 『玉葉和歌集全注釈 別巻』(笠間書院 一九九六年)
9. 「十三代集系統分類一覧―分類基準歌と系統分類表―」(「自讃歌注研究会会誌」第九号・二〇〇一年)

〔付記〕

今回、佛敎大学の御厚意により、未整理・未調査の資料を閲覧させて頂いた。茲に記して、謝意を表する次第である。

(ちゅうじょう あつし・皇學館大学教育学部助教)

(せんこりえこ・京都文教短期大学幼児教育学科教授)